オーストラリア文学の魅力

有満保江
（言語文化教育研究センター助教授）

私がオーストラリア文学研究をはじめたのは一九八〇年代のはじめの頃のことです。オーストラリアとニュージーランドの作品を、翻訳によって日本にはじめて紹介したのがそもそものきっかけでした。それ以後すっかりオーストラリア文学の魅力にとり憑かれてしまいました。

一昔前までは、「オーストラリア文学を研究しています」と言うと、たいていの人は不思議そうな顔をしました。オーストラリア文学なるものがいったい存在するのか、と言いたげな人も中にはいました。日本だけではなく、オーストラリアにおいてもそうだったのですから。私は、一九八二年から一九八五年にかけて、The Australian National University の大学院に留学したのですが、この大学院でオーストラリア文学を専攻していたのは、カナダや南アフリカ、イタリア、中国、そして日本（私のこと）からの留学生だけ。当時英文学科に属するオーストラリア人学生は、自分たちの国の文学の存在を認めたくなかったのでしょうか、アメリカ文学やイギリス文学のいずれかを専攻するのが普通だったようです。したがって、東洋からの留学生がオーストラリア文学なんぞに興味をもつこと自体、彼らには摩訶不思議なことに思えたのでしょう。

しかし、今ではオーストラリア文学の状況も大きく変わりました。かつてはイギリス文学の亜流として捉えられがちだったオーストラリア文学も、一九七三年にパトリック・ホワイトがノーベル文学賞を受賞、この時「オーストラリア文学を世界地図にのせた男」と評され、以後、次第にヨーロッパの文学の流れとは異なる、自由で奔放な、かつてどこにも見られなかった独自の手法によるオーストラリアの文学が生まれるようになったのです。それというのも一九七〇年代半ばからオーストラリアには、ヨーロッパやアジア、中近東からの移民によって多文化社会が形成されたからなのです。ロシア系、レバノン系、ギリシャ系、シンガポール系作家という具合に、多彩な民族的背景をもつ作家が登場し、とくに最近ではアジア系作家の活躍が目をひきます。

冷戦後、世界はボーダーレスな傾向にあり、文化的にもポスト・モダン、ポスト・コロニアルの時代とさかんに言われていますが、この国の多様な文学状況を見ていると世界の流れがそのまま反映されているように思います。多様な民族に加えて、先住民であるアボリジニの文学も注目され、今、オーストラリア文学は未来に向ってさまざまな可能性に挑戦していると言えるでしょう。日本にもっとオーストラリア文学の紹介を、と願うこの頃です。

シェイクスピアの正体

辻　英子
（女子大学専任講師）

「何をご研究ですか」と聞かれて、「あの…シェイクスピアです」と答えると、英文学に多少なりとも通じている相手であれば、大抵「ほーっ…」とか「まぁ…」という嘆声と共に、憐れみと同情のこもったまなざしを返して下さる。（「…」の部分には「身の程知らずな」とか「お気の毒に」という言葉が省略されているのである。）

シェイクスピアと下手にかかわると身動きが取れなくなるということを学生時代から何度も聞かされてきた。作品を読んでも、作者の本音はどこにも見えない。伝記的資料は皆無に等しい。「シェイクスピアについて何かを言うと自分自身について語ることになってしまう」と言われるように、作品の分析をしているうちに、自らの人間としての技量を端無くも露呈することになってしまう。ここ何十年かの文学批評の流れの中で「解体」され、「脱構築」されつくしたかに見えても、この四百年前のイギリスの劇作家は、依然として謎めいた微笑みを浮かべながら、反対に、近づく者を片っ端から「蜘蛛の巣」の中にからめ捕ってしまう、そんな恐ろしさを持っている。

女子大の英文学科に入学以来、できれば一生近づきたくないと思っていたシェイクスピアに、無謀にもはまり込むことになってしまったきっかけは、四年次のシェイクスピア劇上演の授業だった。戯曲を、原語のままで舞台の上に再現してみるという作業は、私にとっては、劇の理解として最も自然な方法に思えた。

台本を片手に、古今の何千、何万という演じ手たちが語ったであろう科白を自分自身も繰り返しているうちに、机の上の黙読だけでは感じ取れなかった「座付き作家」としてのシェイクスピアの素顔がほの見えてくるような気がする。それは、一人の個人というより、エリザベス朝という演劇の黄金時代の舞台と観客が作り上げた集合体のエネルギーそのものであるような気がする。

そのエネルギーのうねりに魅せられて、現在も母校で学生と共に、シェイクスピアの原語上演に取り組んでいる。足掛け二年という時間とエネルギーをかけて、この授業を続けていけるのも、シェイクスピアという不思議な力を再現したいという思い故である。

今日、溢れる情報に食傷し、ともすれば受け身な姿勢になりがちな学生たちが、過去の異国の戯曲というとっつきにくい素材に対して、鑑賞でも観劇でもなく、上演という最も能動的な関わりをすることで、いきいきとするのを見るにつけ、教えられることは多い。

「荒野で叫ぶ声」を求めて

小﨑　眞（女子中学・高等学校教諭）

「牧師の子」として、生命を受け、思春期の反発・回り道を体験しながら、不思議な事に、聖書科の教師・牧師としての今がある。教会、家庭で受けたキリスト教信仰への多大な感謝と共に、自身の中に育まれた信仰への懐疑が現在の私の歩みを築いている。九〇年から九二年にかけ北米で研究する機会を与えられ、そこでの体験が今の私の研究課題となっている。そこで、提出した論文内容の概略を以下に簡単に紹介する。

この神学的作業の主な目的は日本基督教団（以降…教団）の現代の宣教についての再考と将来の可能性への探求を導くアジェンダーを創造することにあった。このアジェンダーは今まで私達が無視してきた現実や私達の無視を許してきた私達の背景／文脈（context）に気づくことへと導く。そして、福音を基とする人間観を再検討し、人間尊厳を賛美する具体的行動を導き出し、福音の命ずる宣教を再構築する。以下の検討を通して、結論として、アジェンダーを創造した。和解の宣教への力を与える創造的礼拝試案、教育プログラムもその中で提示された。

一章…日本におけるコンテキスト神学（Contextualized Theology）の手掛かりとして、教団の教会の調査、及び、その調査結果の分析による宣教課題の明示。

二章…聖書とそれ自体のコンテキストとの対話による聖書学的作業。聖書の証言に描写される創造・預言者的洞察・この世の受肉的現実の分析。被抑圧者のコンテキストで神の業・イエスの宣教の再解釈を通し、現代のコンテキストで、人間理解と自己理解への観点を導くもう一方の声（alternative voices）への傾聴。

三章…現代天皇制下の多数派意識の分析を通し、日本社会の体質として民族中心主義・国家的排外主義が明示され、同時に、被抑圧者の現実も提示される。特に、被抑圧者とのインタヴューが主要な資料として議論され、差別を温存する社会構造の体質と人々の意識の複雑な絡みが明らかにされる。

四章…長く宣教の主要課題から無視されてきた被抑圧者への教団の宣教、その宣教を導く教団自体の体質・資質、が分析され、被抑圧者の現実と体験、そのただ中から発せられる声によって、宣教の課題が探求される。

この作業を通して、被抑圧者の友となったイエスの真実の声に出会ったと確信する。多様性を賛美し、人間性の調和への限りない挑戦を行ったイエス・キリストの宣教を求めて止まない。現在、聖書科教師・牧師として、具体的現場で、この視点に立ち、教育プログラムを探求中である。今まさに、「荒れ野で叫ぶ声」に傾注したいものである。